

〔原 著〕

医療・福祉系学生の情動知能とスキルに関する研究 ～学生と看護師・介護士の情動スキルの比較～

小玉 有子¹⁾、奈良 知子¹⁾、戸来 睦雄²⁾、齋藤三千政¹⁾

要 旨

医療・福祉系学生の情動に関するスキルの低下が懸念されている現状を踏まえて、本研究では、社会人と学生の情動スキルの比較から学生の特徴や課題を明確にすることを目的とした。A県およびB県の医療・福祉系大学の学生205名、病院および介護施設に勤務する看護師・介護士250名を対象に、情動スキルに関する質問紙調査を行い、結果を分析した。情動スキルの自己評価では、15項目中11項目で学生の評価が社会人より有意に高かった。感情〈喜怒哀楽〉を表す語彙については、語彙数では社会人と学生の間大きな差はなかったが、語彙の質的な評価では、〈喜怒哀楽〉すべての項目で社会人の評価が高かった。また、心情の読み取りでは、社会人に比べて、学生が心情を読み取れていないことがわかり、学生の自己評価と実態の差が明らかになった。

キーワード：情動スキル、若者ことば、情動の読み取り

I 緒 言

近年、若者の言語は簡略化され、感情の機微を表現する語彙を知らない者も増えている。「やばい」「うざい」等本来の意味とは異なることばが、日常的に使われていたり、表現されたことばの裏側に隠された感情を読み取ることができなかつたり、若者の感情表現や情動の読み取り能力の低下が懸念され、文部科学省は平成22年「コミュニケーション教育推進会議」を発足させた。また、看護学生のコミュニケーション能力の不足も指摘されており、教育課程においてもコミュニケーションに関する教育内容の強化が指示された（厚生労働省医政局看護課2007）¹⁾。

対人関係を円滑に運ぶための知識・能力・技術を意味する概念として、社会的スキル（ソーシャルスキルとも称される）は周知されているが（堀毛1991）²⁾、近年、情動知能（Emotional Intelligence）、情動に関するスキル（以下情動スキルという）に対する関心が、我が国でも年々高まってきている。世界各国で情動知能についての議論がなされ、様々な定義が発表されているが、その中で最も有名な定義がSalovey & Mayer (1990, 1997)^{3) 4)}の定義で、情動知能を、情動を扱う個人の能力と定義し、

さらにLow, Wong & Song (2004) は、その下位能力を、1) 自分や他人の感情 (feeling) や情動 (emotion) を監視する能力、2) これらの感じ方や情緒の区別をする能力、3) 個人の思考や行為を導くために感じ方や情緒に関する情報を利用できる能力であるとしている⁵⁾。また、世界保健機関 (WHO) が「日常の様々な問題や要求に対し、より建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」と定義しているライフスキルにも、「効果的なコミュニケーション能力」「共感する能力」「感情を制御する能力」が挙げられ⁶⁾、世界的に情動に関わるスキルの向上が、大きな課題となっている。

医療・社会福祉において対人支援を行うスタッフは、患者や高齢者の情動を理解し、さらに「日常の様々な問題や要求に対し、より建設的かつ効果的に対処」しなくてはならない。つまり高い情動知能と実践するスキルが必要となる。患者や高齢者とのコミュニケーションにおいて、情動・感情・気分を表す表現は、本人の状況を理解するための重要な手がかりである。また、ことばでは表現されなくても、状況や非言語的情報から患者や高齢者の心情を読み取るためのスキルも必要である。しかし、これらは短時間で身に付くものではなく、教育と体験とトレーニングの積み重ねにより、獲得されるもので

1) 弘前医療福祉大学保健学部

2) 弘前医療福祉大学短期大学部

ある。

現代の若者の情動知能や情動スキルの低下を考えると、医療や社会福祉の現場に出て行く学生に対しては、早い時期からの、情動スキル向上のプログラムやシステムが必要になっていると考える。

そこで本研究では、医療・福祉系学生と、医療現場や社会福祉の現場で勤務経験を持つ看護師（准看護師を含む。以下看護師と表記する）・介護士（介護福祉士、ヘルパー、その他介護に携わる職員を含む。以下介護士と表記する）の情動スキルの比較から、学生の特徴や課題を明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

1 対象

学生は、A県およびB県の医療・福祉系大学および短期大学3校に2011年度に入学した205名、社会人は、同年度同県の病院および介護施設9施設に、看護師・介護士として従事している250名を対象とした。

2 調査方法

無記名の選択肢式および自由記述式併用の自記式質問紙を作成し、学生には、対象者全員を3回に分けて、共同研究者が研究の趣旨および倫理的配慮について口頭で説明し、アンケート用紙を直接配付した。同意した学生はその場で記入し、記入後直ちに回収箱にて回収した。社会人への依頼は、共同研究者が各施設を訪問し、施設長に研究の趣旨および倫理的配慮について口頭および文書で説明した。その後各施設長が職員に説明し協力を仰ぎ、同意を得られた職員にアンケート用紙を配付した。社会人には、アンケート用紙と一緒に、研究の趣旨、倫理的配慮を記した文書と回収用の封筒を配付した。アンケートの回収は、配付後2週間留置、個別に封筒に入れて提出するよう依頼した。

3 調査内容

1) 属性

学生は専攻と年齢、社会人は職業と年齢とした。

2) 情動に関するスキルの自己評価

豊田らが作成した高校生用J-ESCQ (Japanese Version of Emotional Skills & Competence Questionnaire) を一部改変した15項目を使用した。評価内容は、〈情動の表現と命名〉5項目 (1. 4. 7. 10. 13)、〈情動の理解と認識〉5項目 (2. 5. 8. 11. 14)、〈情動の抑制と調節〉5項目 (3. 6. 9. 12. 15) である。各項目は、1 (まったくあてはまらない) ~ 5 (かなりあてはまる) の5段階で回答し、得点が高いほど肯定的な認識を持つことを示す。

3) 感情・気分・情動に関する使用語彙の調査

感情・気分・情動を表す語彙を、喜怒哀楽別に、普段使用していることばも含めて、思いつく限りのことばを記入して貰った。表出された語彙は、研究者らが決めた基準をもとに評価した。広辞苑 (五版)、明鏡国語辞典の両方に登録されていて、辞書に記載されている意味や用例と、ほぼ同じように使用されている語彙を3点、どちらか一方の辞典の場合を2点、辞典に登録されていないが、その意味が読み取れる場合を1点とし、明らかな誤用や感情表現として不適当と思われる場合を0点とした。なお、辞書は、学生の使用頻度が高い電子辞書 (カシオ) に所載されたものを使用した。

4) 感情の読み取り

愛児を失った父親の心情をうたった詩 (三重大学入学試験問題文 作者不明) を読んで、作者 (父親として) の心情を読み取らせた (資料1)。なお、詩の仮名遣いが旧仮名遣いであったため、学生が理解しやすいように、共同研究者が新仮名遣いに変えて使用した。作者の心情を、具体的な根拠に基づいて深く読み取っている場合は3点、具体的な根拠はないが、単純な読み取りができていない場合は2点、読み取れていないか、表現が不適切な場合は1点とした。

上記の評価は、研究対象とは無関係な心理系大学院生のグループと、日本語表現法を担当する共同研究者がそれぞれ行い、双方の評価結果を総合的に判断したうえで決定した。

資料1 詩

毛糸にて編める靴下をもはかせ
好めるおもちゃをも入れ
あみがさ わらじのたぐいをもおさめ
石をもて棺 (ひつぎ) を打ち
かくて野に出でゆかしめぬ
おのれ父たるゆえに
野辺の送りをすべきものにあらずと
われひとり留まり
庭などをながめてあるほどに
耐えがたくなり
煙草を嘯 (か) みしめていたりけり

※おのれ父たるゆえにー当時の慣習にしばられて
野辺の送りー墓場へ埋葬すること

(三重大学入学試験問題文 一部変改)

4 分析方法

分析には、SPSS17.0Jを使用して、Leveneの検定、母平均の差をt検定、Mann-WhitneyのU検定を行った。

5 倫理的配慮

対象者に、口頭および文書で、研究目的、調査協力の任意性、不利益の有無、個人情報やデータの管理方法等を説明し、同意が得られた方にのみ、質問紙の記入をお願いした。本研究は、弘前医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ 結果

1 対象の属性

社会人237名(回答率94.8%)、学生189名(回答率92.2%)から回答があった。社会人は、看護師(46.4%)、介護士127名(53.6%)で、学生の専攻内訳は、看護学45名(23.8%)、作業療法学38名(20.1%)、言語聴覚学26名(13.8%)、介護福祉80名(42.3%)であった。また、年齢構成は、社会人は10代54名(22.8%)、20代67名(28.3%)、30代55名(23.2%)、40代58名(24.5%)、50代3名(1.3%)で、学生は10代146名(77.2%)、20代27名(14.3%)、30代10名(5.3%)、40代5名(2.6%)、50代1名(0.5%)であった(表1)。

表1 対象者の属性

		社会人 (n=237)		学生 (n=189)	
		n	(%)	n	(%)
社会人職業	看護師	110	(46.4)		
	介護士	127	(53.6)		
学生専攻	看護学専攻			45	(23.8)
	作業療法学専攻			38	(20.1)
	言語聴覚学専攻			26	(13.8)
	介護福祉専攻			80	(42.3)
年齢	10代	54	(22.8)	146	(77.2)
	20代	67	(28.3)	27	(14.3)
	30代	55	(23.2)	10	(5.3)
	40代	58	(24.5)	5	(2.6)
	50代	3	(1.3)	1	(0.5)

2 情動に関するスキルの自己評価

情動スキルに関する自己評価では、社会人より学生の自己評価が、15項目のうち、「1 自分の気持ちをすぐに言葉に表すことができる。」「2 私は、相手が思っていることを隠そうとしても、それに気付くことができる。」「5 私は、相手が嫌な気持ちを隠そうとしても、それに気付くことができる。」「7自分が感じている気持ちを、うまく表すことができる。」「8 私は誰かと一緒にいるとき、その人の気持ちの変化(嬉しい・悲しい・楽しい・怒る等)に気付くことができる。」「9 気分が良い時には勉強(仕事)がはかどり、頭にもよく入る。」「10自分がどのように感じているかを、簡単に言葉で言い表すことができる。」「11 私は、一緒にいる人が落ち込んでいるとき、それに気付くことができる。」

「13 自分の気持ちを、上手く言葉や態度で表すことができる。」「14 私は、相手の顔の表情から、その人の気持ちがわかり、どんな気持ちなのか言葉にすることができる。」「15 気分が良い時には、どんな問題でも解決できると思う。」の11項目で、有意に高かった(表2)。

社会人では、平均3.00未満の項目が5項目あったのに対し、学生は1項目のみであった。社会人の5項目のうち4項目は、〈情動の表現と命名〉の項目で、学生の1項目も同様であった。

社会人・学生両者が最も得点の高かった項目は、「6誰かに誉められると、もっと熱心に頑張ろうとする。」で、両者とも最も低かった項目は、「4自分の気持ちを、上手に言葉で説明することができる。」であった(表2)。

3 社会人と学生の語彙の比較

社会人が答えた喜怒哀楽を表すことばは、〈喜〉社会人総数378個、1人平均1.59個、学生総数351個、平均1.86

表2 情動スキルに関する自己評価

質問項目	社会人(n=237)		学生(n=189)		有意水準
	M	SD	M	SD	
1. 自分の気持ちをすぐに言葉に表すことができる。	3.17	0.85	3.48	1.01	***
2. 私は、相手が思っていることを隠そうとしても、それに気付くことができる。	3.21	0.80	3.53	0.88	***
3. 毎日いい気分が続くように心がけている。	3.65	3.70	3.75	3.03	
4. 自分の気持ちを、上手に言葉で説明することができる。	2.76	0.88	2.92	0.96	
5. 私は、相手が嫌な気持ちを隠そうとしても、それに気付くことができる。	3.33	0.77	3.66	0.85	***
6. 誰かに誉められると、もっと熱心に頑張ろうとする。	3.95	0.85	4.08	0.91	
7. 自分が感じている気持ちを、うまく表すことができる。	2.96	0.86	3.20	0.96	**
8. 私は誰かと一緒にいるとき、その人の気持ちの変化(嬉しい・悲しい・楽しい・怒る等)に気付くことができる。	3.65	0.73	3.88	0.80	**
9. 気分が良い時には勉強(仕事)がはかどり、頭にもよく入る。	3.63	0.89	3.88	1.05	**
10. 自分がどのように感じているかを、簡単に言葉で言い表すことができる。	2.97	0.78	3.24	0.92	***
11. 私は、一緒にいる人が落ち込んでいるとき、それに気付くことができる。	3.68	0.80	3.93	0.78	***
12. 嫌な気持ち(腹が立つ・辛い等)になったとき、気持ちを切り替えて頑張ろうとする。	3.45	0.94	3.48	1.07	
13. 自分の気持ちを、上手く言葉や態度で表すことができる。	2.89	0.82	3.28	0.98	***
14. 私は、相手の顔の表情から、その人の気持ちがわかり、どんな気持ちなのか言葉にすることができる。	3.00	0.78	3.33	0.85	***
15. 気分が良い時には、どんな問題でも解決できると思う。	2.94	0.88	3.29	1.02	***

*** P < 0.001 **P < 0.01

表3 喜怒哀楽を表す語彙〈上位15位〉

喜					
社会人 (n=237)			学生 (n=189)		
語彙	評価	n	語彙	評価	n
うれしい	3	125	うれしい	3	106
やった	2	48	やった	2	63
しあわせ	3	25	しあわせ	3	22
ラッキー	3	22	わーい	3	16
よかった	1	19	よっしゃ	1	11
おいしい	2	9	ラッキー	3	11
たのしい	3	9	いえい	0	9
ハッピー	3	7	さいごう	3	9
わーい	3	7	やばい	0	9
ワクワク	3	6	大好き	3	7
よし	1	5	たのしい	3	6
よっしゃ	1	5	ハッピー	3	6
ウキウキ	3	4	あげぼよ	0	5
気持ちいい	3	4	まじで	0	5
さいごう	3	4	好き	3	4
すごい	3	4			

怒					
社会人 (n=237)			学生 (n=189)		
語彙	評価	n	語彙	評価	n
むかつく	3	65	むかつく	3	71
イライラ	3	48	イライラ	3	39
腹が立つ	3	37	腹が立つ	3	29
頭にくる	3	36	うるさい	3	14
イラッ	1	9	なんなの	1	14
くやしい	3	8	うざい	0	13
ムカムカ	3	8	頭にくる	3	11
どうして	1	7	ふざけるな	3	11
なんで	3	7	ありえない	0	10
なんなの	1	7	いらつく	3	10
バカ	3	7	さいあく	3	9
いいかげんにしろ	3	6	きれる	3	6
きらい	3	6	死ぬ	3	6
ダメ	3	6	は	0	6
ブンブン	3	6	意味わからない	1	5
もう	2	6	きもい	0	5
			やめて	1	5

哀					
社会人 (n=237)			学生 (n=189)		
語彙	評価	n	語彙	評価	n
かなしい	3	77	かなしい	3	71
さみしい	3	38	さみしい	3	19
つらい	3	20	つらい	3	14
おちこむ	3	13	いやだ	3	12
なきたい	3	13	はあ	0	12
シクシク	2	11	なきたい	3	11
ショック	3	10	テンションがさがる	1	8
くるしい	3	9	さげぼよ	0	7
涙が出る	3	9	せつない	3	7
はあ	1	8	死にたい	3	6
へこむ	3	8	どうして	3	6
くやしい	3	7	むなしい	3	6
ざんねん	3	7	くるしい	3	5
がっかり	3	6	しょぼん	3	5
いたい	3	5	なんで	3	5
せつない	3	5			

楽					
社会人 (n=237)			学生 (n=189)		
語彙	評価	n	語彙	評価	n
たのしい	3	74	たのしい	3	83
ワクワク	3	35	おもしろい	3	13
ウキウキ	3	32	わーい(わあい)	3	12
おもしろい	3	28	いえい	0	11
ルンルン	1	17	やばい	0	10
うれしい	3	13	やった	2	9
ラッキー	3	8	ワクワク	3	9
ランラン	1	8	ウキウキ	3	8
やった	2	7	テンションがあがる	1	7
気持ちいい	3	6	あげぼよ	0	6
ドキドキ	3	6	しあわせ	3	6
アハハ	2	5	ルンルン	1	6
ハッピー	3	5	さいごう	3	5
さいごう	3	4	うれしい	3	4
いいね	1	3	気分がいい	3	4
たのしみ	3	3	ドキドキ	3	4
わーい(わあい)	3	3	ハッピー	3	4
ワイワイ	3	3			

個。〈怒〉社会人総数424個、平均1.79個、学生総数424個、平均2.24個。〈哀〉社会人総数336個、平均1.42個、学生総数315個、平均1.37個。〈楽〉社会人総数316個、平均1.33個、学生総数258個平均1.37個で、1人あたりが知っている平均語彙数は、〈怒〉で学生が有意に多かった。

4 上位語彙の評価レベルの比較

喜怒哀楽の上位15位までを選び、その評価平均点を比較した。喜怒哀楽のすべてにおいて、社会人の方が学生より平均点が有意に高かった。また、社会人には評価0の語彙が1個もなかったのに対し、学生では〈喜〉で「いえい」「やばい」「あげぼよ」「まじで」、〈怒〉で「うざい」「ありえない」「は」「きもい」、〈哀〉で「はあ」「さげぼよ」、〈楽〉で「いえい」「やばい」「あげぼよ」と、全体で13個あった(表3・4)。

表4 上位語彙の評価比較

	社会人(n=237)		学生(n=189)		有意水準
	M	SD	M	SD	
喜	2.62	0.65	2.42	0.95	*
怒	2.81	0.57	2.43	1.10	**
哀	2.89	0.40	2.62	0.95	**
楽	2.76	0.63	2.42	1.09	**
全体	2.76	0.59	2.46	1.03	**

*** P < 0.001 **P < 0.01

5 感情の読み取りの比較

愛児を失った父親の悲しみの読み取りに記述したものは、社会人が198名で社会人全体の83.5%で、学生は164名で学生全体の86.8%であった。内訳は、作者の心情を具体的な根拠に基づいて深く読み取ることができたのは、社会人144名(73.2%)、学生82名(50.0%)、具体的根拠はないが、単純に読み取ることができたのは、社会人55名(26.8%)、学生77名(47.0%)であった。読み取られていないか、表現が不適切なものは、学生にのみ5名

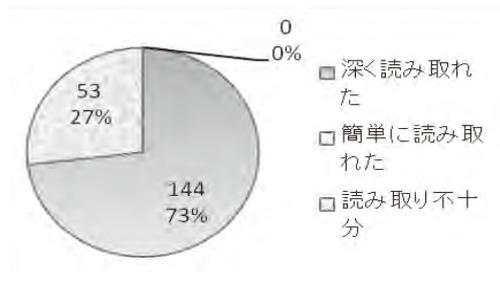


図1 感情読み取り（社会人）n=198

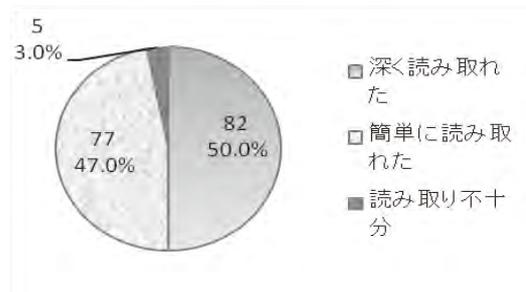


図2 感情読み取り（学生）n=164

(3.0%)いた(図1、図2)。評価の平均値は社会人が2.73、学生は2.47で、有意に社会人が高かった。

IV 考察

1 社会人の情動スキルに関する評価と認識

社会人が知っている、または使っている情動・感情・気分を表す語彙は、世代を超えて理解されるような語彙が多かった。特に、病院や介護施設の現場で、多用されているであろうネガティブな感情〈怒〉〈哀〉の表現では、平均評価点数が高く、日常においても、無意識のうちに、高齢者や小児にも理解できるようなことばを使用していることが伺えた。また、情動の読み取りに関しても、高い割合で、愛児を亡くした父親の悲しみを深く読み取ることができていた。看護師や介護士は、仕事柄死に直面することも多く、家族の悲しみを身近で感じたり、自分の無能感に落ち込んだりという体験も経験していると思う。これらの体験が、父親の気持ちを読み取る際に、大いに活かされたものと考えられる。また社会人は、30代55名(23.2%)、40代58名(24.5%)と約半数が子育て世代であることから、子どもを亡くするという経験を、自分に置き換えて、共感的に理解することができたとも考えられる。職場や家庭での経験が、語彙の選択や感情の読み取りのスキルの向上に、良い影響を与えているといえよう。

しかし、それにもかかわらず、社会人の情動スキルに関しての自己評価は、学生に比べてかなり低くなっている。自分の〈情動の表現と命名〉では、5項目中4項目で平均値3を下回り、自分の気持ちを出表することを、難しいと考えている人が多いということがわかった。相手の〈情動の理解と認識〉の項目では、すべて3点を上回っているものの、すべての項目で学生より低い評価となっている。社会人は職場でのいろいろな経験から、日常の情動スキルの評価を、自分が理想とするイメージ通りにはできないと感じていると考える。

2 学生の情動スキルに関する評価と認識

情動スキルの自己評価の結果からは、学生が自分の情動スキルに不安を感じていないことがわかる。特に、相手の〈情動の理解と認識〉では高い評価をしている。学生は、相手の思っていることや気持ちの変化、嫌な気持ちや落ち込み等ネガティブな感情にも気付けると感じている。しかし、愛児を亡くした父親の心情をうたった詩からの読み取りでは、深く読み取れた学生は半数にすぎず、学生の自己評価とのギャップを感じる。また、自分の〈情動の表現と命名〉についても、自己評価では気持ちや感情をうまく表せていると感じているものの、学生の使用語彙は若者言葉も多く、自分の気持ちを、相手に的確に伝えられているかどうか危惧される。

3 学生の情動をあらわす語彙

社会人と学生の比較では、知っている語彙数は〈怒〉以外では差がなかったが、語彙の質的評価では、社会人が使用している語彙の評価が高いことから、一般的に理解される語彙、世代を超えて理解できる語彙を使用していることがわかる。一方学生は、〈喜怒哀楽を表すことば〉と聞かれて、普段使っていない語彙がとっさに出てこなかったであろう。日常的には、同世代や友人間だけで通用することばや、自分なりの表現等を使用することが多いのだと感じた。若者が日常生活やweb上で用いる表現(若者言葉と呼ばれている)は、非常に多くのバリエーションがあり、日々増加している。久保村らは、若者言葉をタイプ別に分類し、省略型の若者言葉を、辞書に登録されている語彙(既知語)に変換する手法を提案しているが⁷⁾、感情を表現する語彙は、微妙なニュアンスの違いがあるため、「あげぽよ」「さげぽよ」「やばい」等、既知語に変換することは難しい。「やばい」は、今回の調査で、〈喜怒哀楽〉すべての項目で見られた。使う場面や、対象が変わると、「やばい」は多様な意味を持つことがわかる。

このように本来の意味とは違う語彙を、多くの若者が当たり前のように使っているため、本来の意味ではない

使い方が、今後一般化してしまうことが危惧される。また、1人しか記述しない語彙が学生や若い社会人に多く見られ、共通のことばから、個人あるいは少人数のグループでのみ理解されることばに分散されていくように感じた。しかし、それは一定の年齢層や、限られたコミュニティでのみ共通理解されるのであって、若者言葉の微妙なニュアンスは、高齢者や小児には理解が難しいと思われる。

4 学生の情動スキルに関する課題

総務省の調査では、日本の携帯電話の普及率は、23年度末で94.5%に達し、若者の「LINE」利用率も年々増加している。10代男性と20代女性の約半数が利用しているという報告もある^{8) 9)}。学生の日常のコミュニケーションスタイルは、ソーシャルネットワークや電子メールを活用する、遠隔コミュニケーション優位の文化的・育成的背景を反映している。遠隔・間接的コミュニケーションの生活習慣を持つ学生が、スタッフとしてクライアント（患者や高齢者）の前に立つ場面で、果たして自他が期待するレベルで活動できるのか、大きな不安が指摘されている（竹内美香 2006）¹⁰⁾。電子メールやLINEでは、文字情報だけでは伝えきれない感情や気分を、絵文字・顔文字・スタンプ等で補っており、そのことでトラブルも回避している。しかし現実場面では、患者や高齢者の心情を、状況やことば、非言語的情報等、複雑な情報を基に判断し、適切なコミュニケーションをとらなければならない。本調査結果からは、学生にその能力やスキルが十分備わっていないことが明らかになった。したがって、自己と相手の感情の推移を感受し、行動を調整するスキルを身につけるため、「情動に関する能力やスキルの理解」「実習を通しての体験的トレーニング」「情動に関する自己評価の習慣化」が重要になってくると思われる。限られた教育課程の中にあっても、学生の情動に関する能力・スキルの向上のためのプログラムを構築し、教育内容のより強化を図ることが今後の課題である。

V 本研究の限界と今後の課題

情動スキルは、文字やことばの情報からの読み取りだけでなく、非言語的な情報からの感情の読み取りや、状況判断による感情の読み取り、相手の感情理解後の対応等多くの要素がある。今回の調査では、限られた内容での比較であったため、学生の能力やスキルを総合的に評価できているとは言い難い。今後は、実習前後の情動スキルの比較や、状況や非言語的な情報からの読み取りに関する調査項目を検討し、情動知能や情動スキルを総合的に評価し、学生の課題をより明確にしていきたい。また、現行の教育課程の中でも、学生の情動スキルの向上のための教育内容の検討が必要であると考えている。

VI 結論

A県およびB県の医療系大学および短期大学3校の学生205名、病院および介護施設9施設の看護師・介護士250名を対象に、情動スキルに関する質問紙調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 情動スキルの自己評価では、15項目中11項目で学生の評価が有意に高かった。社会人は、全体の3分の1で平均値3を下回り、就労体験を経て、対人支援における情動スキルの難しさを実感しているためと考えられる。
2. 感情〈喜怒哀楽〉を表す語彙については、語彙数では社会人と学生の間、〈怒〉以外に大きな差はなかったが、語彙の質的な評価では、〈喜怒哀楽〉すべての項目で社会人の評価平均値が高かった。社会人は、すべての年齢層に理解される語彙を使用しているが、学生の使用している語彙は若者言葉が多く、高齢者には理解できない語彙が多かった。
3. 愛児を失った父親の心情をうたった詩からの、作者の心情を読み取りでは、具体的な根拠に基づいて深く読み取ることができたのは、社会人14名(73.2%)、学生は82名(50.0%)で、学生は、他者の感情読み取りのスキルが十分でないと考えられる。

VII 謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただきました看護師、介護士、学生の皆様、および各施設長の皆様には、深く感謝申し上げます。

本研究は、平成23・24年度弘前医療福祉大学学長指定研究費をいただいて実施しました。

(受理日 平成26年3月3日)

引用文献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書，Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>, 2007.
- 2) 堀毛一也：社会スキルとしての思いやり，現代のエスプリ，291，150-160，1991.
- 3) Salovey, P. & Mayer, J.D.: Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, 9, 185-

- 211, 1990.
- 4) Mayer, J.D. & Salovey, P.: What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*, pp.3-34. New York: Basic Book, 1997.
 - 5) Law, K.S, Wong, C.S. & Song, L.J.: The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology*, 89, 483-496, 2004.
 - 6) WHO : whqlibdoc.who.int/hq/1994/who_mnh_psf_93.7a_rev.2.pdf
 - 7) 久保村千明, 原田俊信, 佐々木洋輔, 山本義人, 亀田弘之: ブログ記事を素材とする若者語処理システム評価方法, 信学技報 Vol. 105, 2006.
 - 8) 総務省: 平成24年度版情報通信白書, 2012. <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h24/html/ncl122310.html/>
 - 9) IRORIO: 若者から急速に支持を集める「LINE」利用率→10~20代の半数が利用, 10代男性に最も人気と判明, <http://www.irorio.jp/canal/20120824/25124/>, 2014.
 - 10) 竹内美香: コミュニケーション訓練における会話過程の分析—コンテンツと情動喚起の視点から教育指導を考える, 自由が丘産能短期大学紀要, 第39号, 37, 2006.
 - 11) 岩脇洋子, 滝下幸栄, 松岡知子: 臨地実習における看護学生のコミュニケーション技術の学年ごとの特徴の変化—3年課程の看護学生を対象として—*医学教育*, Vol.38, No.5, 309-319, 2007.
 - 12) 岩脇陽子, 滝下幸栄, 山本容子, 松岡知子, 西田直子: 臨地実習におけるコミュニケーション技術に関する研究—基礎看護実習における1年次の習得状況, 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要, 11(1), 53-63, 2001.
 - 13) 北原保雄編: *明鏡国語辞典*, 大修館書店, 2002.
 - 14) 小松寿雄・鈴木英夫: *新明解語源辞典*, 三省堂, 2011.
 - 15) 小矢野哲夫: 若者言葉と日本語教育, *日本語教育*, 134号, 38-47, 2007.
 - 16) 前田富祺: *日本語源大辞典*, 小学館, 2005.
 - 17) 松本和幸・任福継: 感情推定における若者言葉の影響, *言語処理学会第17回年次大会発表論文集*, 846, 2011.
 - 18) 箕輪良行・佐藤純一: *医療現場のコミュニケーション*, 医学書院, 1999.
 - 19) 宮本真巳: 対人関係に根ざす実習指導—プロセスレコードの周辺—, *看護教育*, 48(5), 372-379, 2007.
 - 20) 村松真司, 箕輪良行: コミュニケーションスキルトレーニング—患者満足の向上と効果的な診療のために—, 医学書院, 2007, 論文集, 846-849, 2011.
 - 21) 「もっと明鏡」委員会: *みんなで国語辞典! これも, 日本語* 大修館書店 2007.
 - 22) 森口竜平: 児童期・青年期における感情コンピテンスの特質と発達の傾向に関する検討 (中間報告), *発達研究* Vol. 23, 263, 2009.
 - 23) 森口竜平: 青年期における感情効力感と心理的適応との関連, *発達研究* Vol. 24, 155, 2010.
 - 24) 森田良行: *基礎日本語辞典* 角川学芸出版 2011.
 - 25) 中村 明: *日本語 語感の辞典* 岩波書店 2011.
 - 26) 中村 明: *語感トレーニング—日本語のセンスをみがく55題* 岩波新書 2011.

参考文献

- 1) アーネスティン・ウィーデンバック, キャロライン・E・フォールズ, 池田明子訳: *コミュニケーション効果的な看護を展開する鍵*, 日本看護協会出版会, 2007.
- 2) 相川充: 人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学—, *セレクション社会心理学*20, サイエンス社, 2009.
- 3) 阿部智美: 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連, *日本看護研究学会雑誌* Vol. 36, No. 1, 149, 2013.
- 4) 大坊郁夫・宮原哲: 対人コミュニケーショントレーニング, *日本コミュニケーション学会編*, 56-58, 2011.
- 5) 平本相武: *五感で磨くコミュニケーション*, 日本経済新聞出版社, 2011.
- 6) 藤巻幸夫: *コミュニケーション学*, 実業之日本社, 2010.
- 7) 方 韻: 若者ことばにみる特徴的表現の一考察, 日

- 27) 奈良知子, 渡辺繭子, 上野玲子, 佐藤純子, 佐藤孝: 看護学生のコミュニケーション技術教育についてのリフレクション, 秋田県看護教育研究会誌, Vol.32, 2-7, 2007.
- 28) 新村 出 編 広辞苑 第5版 岩波書店 1998.
- 29) 野呂幾子, 渡辺弥生, 味木由佳: 看護系学生のための日本語表現トレーニング, 三省堂, 2013.
- 30) 奥山真由美, 肥後すみ子, 萩あや子, 村上生美: SP導入によるコミュニケーション演習の授業改善がもたらす学習効果, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 14巻, 81-89, 2008.
- 31) 看護学教育の在り方に関する検討会: 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 看護教育, Vol.43, No.5, 411-431, 2002.
- 32) サンドラ・サヴィニョン: 草野ハベル清子, 佐藤一嘉, 田中春美訳: コミュニケーション能力, 法政大学出版局, 2008.
- 33) 三宮真知子: 思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案—メタ認知の観点から—, 鳴門教育大学学校実教育センター紀要, 19号, 151-161, 2004.
- 34) 柴田 武・山田 進: 類語大辞典 講談社 2002.
- 35) ジョイス・トラベルビー, 長谷川浩訳: 対人関係に学ぶ看護, p.57, 医学書院, 2000.
- 36) 杉本なおみ: 医療者のためのコミュニケーション入門, 精神看護出版, 2013.
- 37) 高橋健太郎: あたらしいカタカナ語辞典 高橋書店 2012.
- 38) 竹内美香: コミュニケーション訓練における会話過程分析, —コンテンツと情動喚起の視点から教育指導を考える, 自由が岡産能大学紀要, 39号, 37-71, 2006.
- 39) 豊田弘司, 山本晃輔: 日本版WLEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) の作成, 教育実践総合センター 研究紀要 Vol.20, 7, 2011.
- 40) 豊田弘司, 酒井雅子: 高校生用情動スキルとコンピテンス質問紙尺度の開発, 教育実践総合センター 研究紀要 Vol.17, 11, 2008.
- 41) 上野玲子: コミュニケーション技術評価スケールの開発とその信頼性・妥当性の検討, 日本看護学教育学会誌, Vol.14, No.1, 1-12, 2004.
- 42) 上野玲子, 藤原郁, 奈良知子他: 看護学教育初期段階におけるコミュニケーション技術・カウンセリング技術教育についてのリフレクション, 秋田桂城短期大学紀要, 8, 27-44, 2000.

The Characteristics of the Emotional Skills of College Students in the Medical and Welfare Field: Comparing Students with Nurses and Care Workers

Ariko Kodama¹⁾ Tomoko Nara¹⁾ Mutuo Herai²⁾ Michimasa Saitou¹⁾

1) Hirosaki University of Health and Welfare

2) Hirosaki University of Health and Welfare Junior College

Abstract

Concern has been raised over the declining emotional skills of college students who are preparing for a career in the medical and welfare field. The purpose of this study was to compare the emotional skills of students with those of nurses and care workers, and by doing so clarify their characteristics and to explore related issues. 205 college students majoring in medicine and welfare and 250 nurses and care workers working in hospitals and nursing care facilities in two prefectures (A and B) completed a survey that measured their emotional skills. The results showed that for 11 items out of 15, the students scored higher than nurses and care workers when they performed a self-evaluation. However, even though there was no significant difference in the number of words used that expressed 4 basic feelings, in terms of the quality of the words used, the nurses and care workers scored higher than the students for all items. Therefore, when it came to reading and perceiving emotions, the students scored lower than the nurses and care workers, indicating a gap between students' self-evaluations and reality.

Key words: emotional skills, youth slang, perceiving emotions